

複数観衆問題と セルフ・モニタリングとの関連¹⁾

笠置 遊*・大坊 郁夫**

The Relation between the Multiple Audience Problem and Self-monitoring

Yu KASAGI* and Ikuo DAIBO**

This study examined the relation between the multiple audience problem and self-monitoring. Participants completed the self-monitoring scale, and reported how often they personally encounter the multiple audience problem per month. They also read five scenarios, then they reported their confidence that they could handle with the multiple audience problem effectively in each situation. The results showed that high self-monitor more encounter the multiple audience problem than low self-monitor. And high self-monitor reported one's ability to be successful in the multiple audience problem higher than low self-monitor. The need to explore the relation between self-monitoring and the overconfidence to be successful in the multiple audience problem was discussed.

key words: multiple audience problem, self-presentation, self-monitoring

問 題

複数観衆問題とは、人が同じ場面において、2人以上の他者に対して異なる印象を与えたいと思うときに生じる自己呈示上のジレンマである (Fleming, 1994)。例えば、恋人に対しては行儀良く礼儀正しい印象、両親に対してはだらしな印象を与えている人は、恋人と両親が同じ場面に居合わせる状況で、どちらの相手に合わせた自己呈示をすればよいのかという複数観衆問題に直面する。従来、人々の複数観衆問題への対処行動について検討がなされてきたが (笠置・大坊, 2010)、パーソナリティ特性との関連につい

ては未だ詳細な検討がなされていない。

これまで、人々の自己呈示の動機づけや行動に影響を及ぼすパーソナリティ特性としてセルフ・モニタリング (以降 SM と表記) が検討されてきた (Leary, 1995)。SM とは、状況や他者の行動に基づいて、自己の表出行動や自己呈示が社会的に適切なかどうかを観察し、自己の行動を統制することである (Snyder, 1974)。高 SM 者は、自分の社会的行動の状況的適切さに関心が高く、相手や状況に応じて呈示する自己の側面を変化させる傾向が強い (Bolino & Turnley, 2003; Leary & Allen, 2011)。一方、低 SM 者は、自分の態度や特性に基づいた自己呈示行動を行うため、状況や相手に関わらず一貫した行動をとる傾向がある (Fuglestad & Snyder, 2009)。このことから、高 SM 者は低 SM 者よりも複数観衆問題に遭遇する頻度が高いと考えられる。そこで、本研究では人々が複数観衆問題に遭遇する頻度と SM との関連について検討することを目的とする。

加えて、Van Boven, Kruger, Savitsky, & Gilovich (2000) は、人々が複数観衆状況においてうまく振る舞うことについての自分の能力を過信していることを明らかにしている。本研究では、複数観衆問題に対処する能力についての自己評価と SM との関連についても探索的に検討する。

方 法

調査対象者 大学生 201 名 (男性 108 名, 女性 93 名; 平均 19.17 歳, $SD=1.39$)。

質問項目²⁾ (a) SM 得点: 日本語改訂版セルフ・モニタリング尺度のうち自己呈示変容能力 (7 項目, 5 件法; 岩淵・水上, 2003; $\alpha=.87$) への回答を求めた。自己呈示変容能力の得点が高い者ほど、相手や状況に応じて自己呈示を変容する能力を有することを示す。7 項目の平均値を算出し、SM 得点とした。(b) 複数観衆問題への対処能力評価: 複数観衆状況が描かれたシナリオ³⁾を 5 種類呈示し、各状況にどの程度うまく対処することができるかについて、7 件法 (1: “全くそう思わない” -7: “非常にそう思う”) で回答を求めた。5 つの状況の平均値を算出し、複数観衆問題への対処能力評価得点とした。(c) 複数観衆

¹⁾ 本研究は、第一著者が平成 23 年度に大阪大学大学院人間科学研究科に提出した博士論文の一部を加筆、修正したものである。また、本論文の執筆にあたり、平成 25 年度立正大学心理学研究所研究助成を受けた。

* 立正大学

Faculty of Psychology, Rissho University, 4-2-16 Osaki, Shinagawa-ku, Tokyo 141-8602, Japan.

** 東京未来大学

School of Motivation and Behavioral Sciences, Tokyo Future University, 34-12 Senju Akebonocyo, Adachi-ku, Tokyo 120-0023, Japan.

²⁾ 調査対象者には、調査への回答は任意であること、個人が特定されるようなことはないことを説明した。

³⁾ 予備調査を実施し、大学院生 14 名 (男性 2 名, 女性 12 名; 平均年齢 24.53 歳) に対して、日常生活で複数観衆問題が生じる状況について自由記述法で回答を求め、計 20 項目が得られた。得られた項目について、大学院生 1 名 (女性, 27 歳) と大学教員 1 名 (男性, 63 歳) が分類を行い、5 つの状況シナリオ (親と恋人が居合わせる状況、親と友人が居合わせる状況、関係初期の友人と親友が居合わせる状況、上司と同僚が居合わせる状況) を作成した。

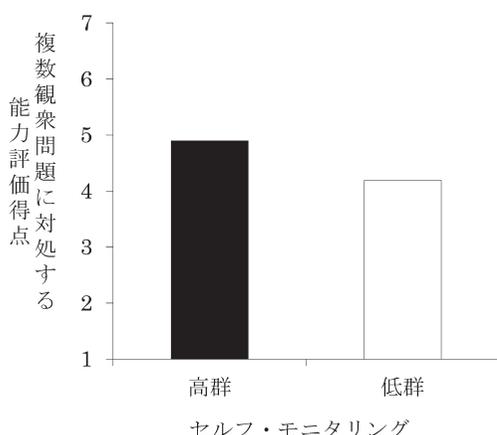


Figure 1 セルフ・モニタリング高・低群における複数観衆問題に対処する能力評価得点

問題に遭遇する頻度：(b)で呈示した5種類の複数観衆状況を踏まえ、過去を振り返り、異なる印象を与えたい相手が2人以上いる状況に遭遇した1カ月あたりの平均回数を尋ねた。

結果と考察

複数観衆問題に遭遇する頻度

調査対象者⁴⁾が1カ月あたりに複数観衆問題に遭遇する回数は、平均2.18回 ($SD=3.73$)であった。

次に、SM得点 ($M=3.22$, $SD=0.04$)の中央値(3.14)以上の得点者を高SM群 ($n=116$; $M=3.55$, $SD=0.38$), 中央値以下の得点者を低SM群 ($n=84$; $M=2.75$, $SD=0.27$)とした ($t(198)=17.67$, $p<.01$)。

複数観衆問題に遭遇する頻度について、SM高・低群に差があるかどうか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、高SM群 ($M=2.62$, $SD=4.50$)は低SM群 ($M=1.57$, $SD=2.19$)よりも、複数観衆問題に遭遇する頻度が多かった ($t(198)=2.18$, $p<.05$)。高SM者は、相手や状況に応じて呈示する自己の側面を変える傾向が強いため (e.g., Leary & Allen, 2011), 自分について異なる印象を抱いている関係相手が多く、複数観衆問題に遭遇する頻度が低SM者よりも多いのだと考えられる。一方、低SM者は、状況に関わらず一貫した自己呈示を行う傾向が高いため (Fuglestad & Snyder, 2009), 高SM者よりも複数観衆問題

に遭遇する頻度が少ないのだと考えられる。

複数観衆問題に対処する能力評価

複数観衆問題に対処する能力評価得点について、SM高・低群に差があるかどうか検討するため、対応のない t 検定を行った結果 (Figure 1), 高SM群 ($M=4.90$, $SD=0.92$)は低SM群 ($M=4.19$, $SD=1.08$)よりも自分の能力を高く評価していた ($t(198)=4.94$, $p<.01$)。高SM者は、状況や相手によって自分の行動を調整する能力が高いことが示されている (Snyder, 1974)。したがって、高SM者は低SM者よりも、複数観衆問題への対処能力を高く評価したと考えられる。さらに、高SM者の複数観衆問題に遭遇する頻度が高かったことから、彼らが日常生活の中で複数観衆問題への対処法を学習し、複数観衆問題に遭遇してもうまく対処できると自分の能力を高く評価した可能性も考えられる。今後は、SMが複数観衆問題への対処能力の過信を促すのか、あるいは対処スキルの高さと関連するののかについて検討する必要がある。また、SM得点の高低によって、複数観衆問題への対処方略がどのように異なるのかを検討する必要がある。

引用文献

- Bolino, M. C., & Turnley, W. H. 2003 More than one way to make an impression: Exploring profiles of impression management. *Journal of Management*, **29**, 141-160.
- Fleming, J. H. 1994 Multiple audience problems, tactical communication, and social interaction: A relational-regulation perspective. *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol. 26. San Diego: Academic Press. pp. 215-292.
- Fuglestad P. T., & Snyder, M. 2009 Self-monitoring. In Leary, M. R. & Hoyle, R. H. (Eds.), *Handbook of Individual Differences in Social Behavior* New York: Guilford Press, pp. 574-591
- 岩淵千明・水上喜美子 2003 日本語改訂版セルフ・モニタリング尺度の検討 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 742-743.
- 笠置 遊・大坊郁夫 2010 複数観衆問題への対処行動としての補償的自己高揚呈示 心理学研究, **81**, 26-34.
- Leary, M. R. 1995 *Self-presentation: Impression Management and Interpersonal Behavior*. Boulder: Westview.
- Leary, M. R., & Allen, A. B. 2011 Self-presentational; persona: Simultaneous management of multiple impressions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **101**, 1033-1049.
- Snyder, M. 1974 Self-monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **30**, 526-537.
- Van Boven, L., Kruger, J., Savitsky, K., & Gilovich, T. 2000 When social world collide: Overconfidence in the multiple audience problem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 619-628.

(受稿：2015.6.9；受理：2016.2.22)

⁴⁾ 予備調査を実施し、大学院生14名(男性2名, 女性12名; 平均年齢24.53歳)に対して、日常生活で複数観衆問題が生じる状況について自由記述法で回答を求め、計20項目が得られた。得られた項目について、大学院生1名(女性, 27歳)と大学教員1名(男性, 63歳)が分類を行い、5つの状況シナリオ(親と恋人が居合わせる状況、親と友人が居合わせる状況、関係初期の友人と親友が居合わせる状況、上司と同僚が居合わせる状況)を作成した。